

「言葉の響き」の視点からみた絵本の分析的研究

山室 和也

1. はじめに ― 問題の所在

本論考は、山室（2019）で取り組んだ、平成29年の改訂幼稚園教育要領における領域「言葉」で新たに加えられた「言葉の響き」についての研究をさらに進めるものである。山室（2019）では、「言葉の響き」については幼稚園での扱いは今回が初めてではあるが、接続する小学校国語科においては、既に平成元年の学習指導要領から具体的な扱いに対する記述がみられることを指摘した。そして、小学校国語科における「言葉の響き」は、「言語感覚」「音声・発音（音読を含む）」「（伝統的な）言語文化」というそれぞれの側面をもつ、いわば三つの領域の接点に位置づけられるということを明らかにした。その中でも、小学校の学習指導要領においては、「言葉の響き」に関わる「言語感覚」の側面が、高学年に移行しつつある中で、平成元年当時には扱われていた低学年における「言語感覚」への視点が幼児教育段階に下りてきたととらえ、それが幼小接続のポイントともなることを指摘した。

それでは、幼児教育（特に幼稚園）において、この「言葉の響き」をどのようにとらえていけばよいだろうか。具体的には、幼稚園教育要領の領域「言葉」のねらい（3）「日常生活に必要な言葉がわかるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。」の中の「言葉に対する感覚を豊かにし」が、新たに加えられた部分である。そしてさらに、「内容の取り扱い」の（4）に「幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。」という記述が新設されていることに対応することになる。

本論考では、幼稚園教育要領におけるこれらの記述から、幼児教育における言葉の領域にもっとも関わりが深い児童文化財に着目し、その中でも特に絵本に焦点を当てて「言葉の響き」についての考察を試みる。そこで、まず「言葉の響き」について、対象とする絵本の児童文化財における位置づけについて考察し、その中から「言葉の響き」と絵本とがどのように関わり、他の児童文化財ともどのように関わるのかを明らかにする。次に、これまでの絵本の研究と「言葉の響き」との関係について検証し、この視点がこ

れまでの研究ではほとんど注目されていないことを指摘する。そしてそのことを踏まえて、具体的に絵本『ふたり』を取り上げ、「言葉の響き」という視点からの分析を行う。最後に、「言葉の響き」という視点から見た絵本の分析的研究の可能性と今後の課題についてまとめる。そこでは、この研究の成果が児童文化財の枠組みを再整理することにもつながるのではないかということにも言及する。

2. 児童文化財における絵本

本章では、児童文化財における絵本の特徴を明らかにするために、いくつかの側面から分析をしてみたい。これは次章以降の「言葉の響き」に関わることでもある。その側面とは、音声的側面、映像的側面、身体的側面とその他の側面である。児童文化財の範囲をどこまで広げるかということを議論することが本論考の目的ではないので、これまで一般的に扱われてきたものを取り上げ、さらに新しい素材として幼児の生活と深い関わりのあるものについても視野に入れて考察してみたい。

2-1. 音声（聴覚）的側面

はじめに、音声（聴覚）的側面である。簡単に言えば、音声を伴う素材かどうかということであり、その視点で整理したものが表1である。

（表1）児童文化財の音声（聴覚）的側面による分類

弱（－） ⇐		音声（聴覚）的側面		⇒ 強（＋）
絵本	紙芝居	童話	手遊び	わらべうた・童謡
マンガ				アニメ・ゲーム

わらべうたや童謡というのは、音声言語に音程やメロディーなどの音楽的要素を加えたものとなり、その側面が最も強いものとして位置づけられる。手遊びも、基本的には「歌」を伴っており、わらべうたや童謡に近い性質を持っている。童話については、文字として書籍に収められている限りにおいては音声的な側面は極めて弱いのであるが、幼児の生活の中での童話となれば、読み聞かせ（または素話）という形でとらえることができるので、手遊びの次に位置づけた。紙芝居と絵本は類似性が高いが、別のものとしてとらえ、読み聞かせの機会の多さ（一人読みの機会の少なさ）という点で絵本よりやや強い方に位置づけてある。絵本は、音声的側面としてはここに挙げたものの中では最も弱く、読み聞かせの素材としてとらえれば、童話と同じような位置に移動してとらえることも可能となる。しかし、絵本の中には字のない絵本もあり、基本は絵を中心としながら、何度も読み聞か

せをしてもらったものを幼児が絵を見ながら思い出したりしてページを繰ったりする素材と考えると、最も弱いものととらえておくのが順当であろう。

表1では、これまでの文化財に加えて新しい素材として、ゲーム・マンガ・アニメについてもまとめてみた。これらの境界線も非常に微妙なところではあるが、マンガは基本的には動かないもの、アニメはそれが次に見る映像の中でも動くものとしてとらえることができる。マンガは絵本と基本的には同じようにとらえることができ、アニメやゲームはわらべうた同様に音声的側面が非常に強いものと考えてよいだろう。

2-2. 映像（視覚）的側面

2-1の音声的側面に対して、映像（視覚）的側面からも同じ文化財を捉えてみると、表2のようになる。

（表2）児童文化財の音声（聴覚）的側面による分類

弱（-） ⇐		映像（視覚）的側面	⇒ 強（+）	
わらべうた・童謡	童話	手遊び	紙芝居	絵本
マンガ・アニメ・ゲーム				

これを見ると、先の表1とは各素材が反対の並びになることがわかる。実は、音声と映像とは表裏一体としてとらえることができ、わらべうたのように耳から入ってくるものが主たる文化財は、目から入ってくる要素が極めて低くなる。逆に絵本のように視覚的な要素が大きいものは、読み聞かせという音声化の過程を経なければ音声的な側面は極めて弱くなる。それぞれに類似する紙芝居なども同様である。マンガ・アニメ・ゲームについては、それとは異なりマンガも映像的側面が強くなるので三つとも強い側に集まってくる形となる。その点が新しい形の児童文化財として考えていかなければならないことでもあるが、本研究の目指すところとはことなるので、ここではこれ以上は言及しないこととする。

2-3. 身体性の側面

2-1及び2-2で見てきたのは、言葉に関する「感覚」としての聴覚・視覚としての側面であった。しかし、幼児の生活における児童文化材の位置づけは、言葉のもつ音声的な側面（リズムや響き）と身体的な側面（体の動きと連動したもの）とをリンクさせた具体的な活動を通して、感情・感覚（楽しさ、おもしろさ、美しさなど）を喚起させることが目指されるものである。そこで、第3の視点として「身体性」の側面から分析を

試みたのが表3である。

(表3) 児童文化財の身体的側面による分類

弱 (-) ⇐		身体的側面	⇒ 強 (+)	
童話	絵本	紙芝居	わらべうた・童謡	手遊び
マンガ	アニメ	ゲーム		

最も身体性の強いものが手遊びとなり、その次に、声を出し歌う（あるいは聞く）というわらべうたや童謡がそれに次ぐものと考えられる。紙芝居は、場面ごとに絵をめくっていきながらそのめくり方に動きを伴ったり音が加えられたりもする。絵本もページを繰る（本によっては向きを変えたりもする）という行為を考えたら、身体性がないわけではない。また、読み聞かせということになれば、読むという音声化、聞くという音声聴取の行為が生じる。

いっぽう、先ほど2-2 で見たマンガ・アニメ・ゲームは、映像的要素が強い反面、身体性の側面が弱いことがわかる。その中でゲームなどは、時代とともに次々進化（変化）しており、身体性を伴う3次元のゲームなども増えてきている。

2-4. その他の側面

最後に、これまでの三つ以外の側面として考えられるものを挙げておく。一つ目が芸術性である。児童文化財の「文化財」という言葉からもわかるように、そこには少なからず芸術性の要素が加味されている。そして、伝統的な言語文化財だけではなく、これまで表1～3で下段に位置づけていたマンガ・アニメ・ゲームというものも、世界的に見れば日本を代表する文化として評価されるようになってきている。このことを考えると、児童文化財として今後ますます重要度が高まることが予想される。

二つ目が、コミュニケーションの側面である。後述するように、絵本にしても他の児童文化財にしても、子どもと親をはじめとする大人とのコミュニケーションの媒介、さらには子ども同士をつなぐ媒介としてとらえられる。絵本は、読み聞かせという行為を通じてそれが具体的な形となる。童話や紙芝居も同様である。

三つ目が、物語性の側面である。これは、芸術性ということとも関わる。絵本や童話（それを基にした紙芝居なども）は、作品としての完結性を持っている。絵本（紙芝居）のひとつひとつの場面に描かれている内容が連続していく中で物語を形成していく。その物語性が文学作品としての芸術性を持つことになる。

以上、その他の側面としてさらに三つを挙げた。これらを通して絵本のさらなる深み

を知ることができる。そして、絵本をはじめとした児童文化財の先行研究は、主にこれら三つの観点からなされてきているともいえる。

2-5. まとめ

児童文化財における絵本の特性を明らかにし、他の文化財との違いなどもみるために音声的側面、映像的側面、身体性の側面を中心に分析を試みた。絵本における「言葉の響き」は、特に音声的側面を中心に、それに加えて身体性の側面が関わっていること、それに加えてその他に挙げたコミュニケーションの側面等も重要な視点となってくることがわかった。

さらに、絵本の特徴が三つの側面において強弱をもちながらも、他の児童文化財との境界が曖昧で、流動的であることも明らかになった。児童文化財は絵本そのものでも様々な種類があること、絵本から紙芝居、紙芝居から手遊び、そして童謡へという変化、童話と絵本との行き来、言葉遊びと絵本など枚挙にいとまがない。また、絵本というものを「本」としてとらえることと、読み聞かせという「行為」としてとらえることとで、その特徴が異なってくるという点でも流動性があり、絵本というものを、固定的に明確に定位することは難しいということも分かった。

そこで、次章では対象を「絵本」に絞って、「言葉の響き」との関わりについて検討する。

3. これまでの絵本の研究

3-1. 絵本と「言葉の響き」

絵本と「言葉の響き」の関わりについて考えるとき、子どもに絵本をはじめとした本を読み聞かせる（あるいは子どもが本を読む）意味にはどのようなものがあるのかを確かめておく必要がある。そうすると、想像力を豊かに育む、語彙を豊富にする、感動し情緒を育てる、言語感覚を身につける、文字に関心を持つ、知的好奇心を満たす、考える力を育てる、読書の始まり、追体験できる、大好きな人と過ごす時間、等が挙げられる⁽¹⁾。その中でも言葉に関わる「語彙を豊かに」「言語感覚を身につけ」「文字に関心を持つ」ことが言葉の獲得にも大きく関わってくるとされている。それでは、子どもにとって絵本による言葉の獲得とはどのようなものなのか。野上秀子（2018）は言葉の感覚的な点をとらえて、次のように述べている。

幼児は、人間らしい情感に溢れた言葉を、耳で聞く幸福感の中で、心を開き、心を表現する豊かな言葉を獲得することができる。また、詩や物語の言葉によって体

験する、言葉のリズム、響き、イメージの創造、その中にある楽しさ、快さといった感覚は、言葉の音声的な刺激によってより鋭敏に磨かれ、それが言葉を生き生きと使う力に発展していく (p.119)。

さらに、幼児にとって言葉は知識と結びついて獲得されるという側面よりは「豊かな、美しい、楽しい、快いリズムや響きをもった、幸福感と共に体感されていく (p.120)」とも述べており、言葉の音声的な刺激に加えて、人間としての感覚・感情とが相俟って言葉が獲得されていくと述べている。ここでいう音声的な刺激こそ、まさに「言葉の響き」に当てはまる。このことは、人間としての感覚・感情が言葉の個々の音とどのように結びついているかということとも大きく関わっている。

さらに、生駒幸子 (2013) は、

本を読んでもらううちに、いろいろな言葉の響き (声) から美しさや楽しさ、ユーモア、また怖さ、悲しさなど複雑な感情や微妙なニュアンスに気づいていきます。日常生活で使う言葉は単調になってしまいがちですが、本との出会いによって言葉への感性が磨かれていくことでしょう (p.121)。

と述べており、先の野上の説明にはなかった「怖さ、悲しさ」というマイナスの感情についても獲得することになることが指摘されている。つまり、「言葉の響き」は、プラスの感情に限定されることなく、多岐にわたる豊かな感覚・感情と結びついているということである。

3-2. 絵本の分類と「言葉の響き」

3-1 で絵本を読むことによって「言葉の響き」がどのように獲得されるかということが明らかとなった。そこで次に、それがどのような絵本によって獲得されるのかという観点で、絵本の分類を見ておきたい。

これも立場によっていくつかのばらつきがある。しかしながら最大公約数として以下のようなものに分類されると言ってよいだろう。

- ①赤ちゃん絵本
- ②創作・物語絵本
- ③昔話・民話絵本
- ④知識絵本
- ⑤言葉・詩の絵本
- ⑥文字のない絵本

⑦写真絵本

⑧しかけ絵本

⑨バリアフリー絵本

この中の「⑤言葉・詩の絵本」というのが、言葉の獲得に直接関わるものとされている。この中には、言葉遊びの要素も含めたものも入れられる。生駒幸子（2013）は、絵本の分類の説明の中で、この「言葉・詩の絵本」について、次のように説明している。

言葉そのもののおもしろさ、美しさを感じるきっかけになる絵本。子どもの生活において言葉の多様なニュアンスを味わうことは、母語の獲得のうえでもとても大切なことです。心に浮かぶ思いを「声」にする経験や、心地よい声と音を聴く経験も幼い時期にたくさんさせてあげたいものです。しりとり・えかきうた・かぞえうたなどの「ことばあそび」や、文字としてのあいうえお・アルファベットの形や音のおもしろさを描いた言葉のイメージを膨らませる絵本などがあります（p.124）。

この説明でもわかる通り、言葉の絵本は「声」を媒介にした「言葉の響き」に関わるだけでなく、「言葉遊び」や「文字への興味・関心」にも関わる側面を持っている実に範囲の広いものとなっている。「言葉の響き」に関する説明としては、武田京子（2016）の「詩や言葉遊び、早口言葉やだじゃれ、オノマトペなどの言葉のリズムの楽しさや音の面白さを楽しんだり、言葉の美しさを味わったりする絵本（p.80）」という説明などもある。他の本でも絵本の分類による言葉の絵本に対してはほぼ同じような説明が付されている。つまり、言葉の響きやリズムの獲得を担っているのが、ここに分類される絵本だということである。

ここには、メタ言語的な言葉への気づきをねらいとしたものも含まれており、文字への関心を持たせるものや、語彙の獲得に発展させるものもあるのだろう。特に「オノマトペ」に注目してつくられた「オノマトペ絵本」というものもある⁽²⁾。

3-3. 絵本に関する先行研究と「言葉の響き」

絵本の分類は、絵本そのものの研究とも大きく関わる。絵本の成立の歴史や、絵本の意義など、その研究の視点は様々であるが、ここではこれまでの絵本研究を概括的にとらえた先行研究を参考に、絵本研究の課題について確認しておきたい。

竹内唯・奥忍（2007）は、絵本のこれまでの研究について「作家論・作品論を別にとすると、これまでの絵本研究は多くの場合、子どものコミュニケーション能力の発達の視点から行われてきた。（p.27）」と述べ、先行研究を踏まえながら「美術と文学は絵本の中で互いに影響し合いながら共存し、一つの世界を構築している」ととらえ、「絵本の表現方

法について分析的な研究を行い、総合芸術としての価値を明らかに」する研究があったことを示唆している。また、これに加えて「読み聞かせの視点」を強調したものとして松井直の研究を挙げている。松井は、美術と文学という二つの世界を統合することで絵本を作ることが「子どもの絵本体験」であるとし、その子どもの絵本体験が、絵の「動き」と「広がり」としてとらえている。そのことに対して、竹内・奥は「それが「語る音声」によって生まれているという事実の認識が放置されている (p.27)」と批判的にとらえている。そして、絵本の中の「音楽性」に注目する中で河合隼雄の研究を取り上げている。そこで着目されたのは「語りの音声」であり、それが絵本の主要な要素であるということである。また、語りの音声は「面と言葉を統合させ、またそれ自身も「音楽」として響くことで、絵本に総合芸術としての生命を吹き込んでいる (p.28)」と主張するのである。

語りとしての音声という点で、絵本が音声化されることに着目している点は評価できる。しかしながら、河合の研究に基づく竹内・奥の研究では、言葉の側面については「絵本の言葉の語りを「音楽」とするならば、文字は「楽譜」である。絵本には、音声表現に影響を与え得る「図譜」としての文字表現がみられる (p.29)」として、文字の配置、行間、文字の大きさなどが分析の中心的な視点となっている。対象としてオノマトペ絵本を取り上げて日本語そのものが持つ音声的特徴について多少言及されてはいるものの、踏み込んだ考察がなされているわけではない。

その一方で、言葉の持つ音楽性という視点でわらべうた絵本を取り上げ、言葉のリズムを中心的に扱って、次のように述べている。

古くから子どもの生活の中で親しまれてきた伝統と温もり、そして言葉の持つ響きやリズムの面白さがわらべうた絵本の真骨頂である (p.33)。

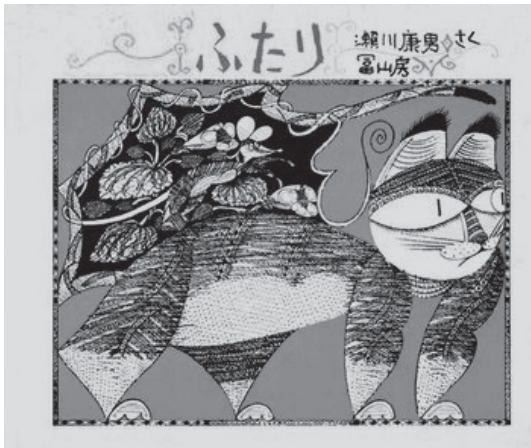
「言葉の響き」とわらべうたとの関わりの深さに言及している点は注目できるが、既にわらべうたには言葉の持つ響きやリズムの面白さがあるという前提で捉えられている。そこでいう「言葉の響き」とはどのようなものなのか、それがどうして「温もり」というものに通じるのかというところの考察はなされていないのである。暗黙の了解事項ということなのであろうか。研究の視点が「音」とはいえ、言語学的な音声ではなく「音楽性」に向かっているので、仕方がないことでもあろう。

絵本を語りの行為としてとらえ、その語りの音声に着目する点は評価できるが、絵本に用いられる言語表現の音声的分析としてはやはり従来のようなオノマトペの研究⁽³⁾にとどまっていると言える。ということは、オノマトペ以外の表現における「言葉の響き」の研究は未開拓な分野と考えられる。

そこで、次章では具体的な絵本を例にしながら、絵本における「言葉の響き」の分析的研究の実際を示していきたい。

4. 絵本の「言葉の響き」分析の実際

4-1. 絵本『ふたり』（瀬川康男・作）の全体像




(図)『ふたり』（瀬川康男・作／富山房）

はじめに、この絵本の全体構成について説明しておく。表4に示した通り、本文が全12場面であるのタイトルである「ふたり」という言葉が最後の12場面で初めて出てきている。そしてその12場面のあとの見返しのページに「おわり」という言葉が載っている。これは、それまでの本の構成に沿ったものとしてまるでつながるように書かれている。




この本は第①場面から第⑩場面までは全て擬態語であり、第⑧場面には言葉がないことから、見返しの第⑬場面を含めても12場面中9場面が擬態語である。その意味からすれば、この絵本はオノマトペ絵本に分類されるかもしれない。しかし、タイトルは決してオノマトペではなく、物語を象徴するネコとネズミを示すものとなっている。

分析表では、場面・絵（画像）と文字、そこに出てくる言葉と音声（母音と子音の音声記号表記）、備考・補注（音声的な面から読み取れる語感や語彙的な補足情報並びに物語の展開に関する情報など）という項目に分けて一覧にまとめた。4-2からの分析では「言葉の響き」に関わるので、母音・子音など発音の部分からの言及が多くなる。また読み取れる語感については、専門的な語感の意味付けとは別に、自分なりの解釈を表4では記した。それぞれの音の語感の解釈については4-2の分析において取り上げる。

(表4) 絵本『ふたり』の分析表

場面 ページ	絵（図）と文字	言葉と音声（記号） 母音と子音	備考・補注
① pp.4-5		にやり [nijari] [i] [a] [i] [n] *[j] [r]	擬態語 表情・柔らかさ

② pp.6-7		きらり [kirari] [i] [a] [i] [k] [r] [r]	擬態語 強さ・鋭さ
③ pp.8-9		ばさり [basari] [a] [a] [i] [b] [s] [r]	擬態語 動き・速さ ここで一区切り
④ pp.10-11		にたり [nitari] [i] [a] [i] [n] [t] [r]	擬態語 表情・粘り
⑤ pp.12-13		ひらり [hirari] [i] [a] [i] [h] [r] [r]	擬態語 動き・軽さ
⑥ pp.14-15		とぷり [topuri] [o] [u] [i] [t] [p] [r]	擬態語 動き・小ささ・軽さ
⑦ pp.16-17		どぶり [doburi] [o] [u] [i] [d] [b] [r]	擬態語 動き・大きさ・重さ
⑧ pp.18-19		(言葉〈音〉なし)	この前後で話の流れ が変わる
⑨ pp.20-21		げろり [gerori] [e] [o] [i] [g] [r] [r]	擬態語 動き・強さ・深さ
⑩ pp.22-23		ばたり [batari] [a] [a] [i] [b] [t] [r]	擬態語 動き・強さ ここで一区切り

⑪ pp.24-25		ねたり [netari] [e] [a] [i] [n] [t] [r]	動詞 + 助動詞 (助詞) 静止・継続
⑫ pp.26-27		ふたり [hutari] [u] [a] [i] [h] [t] [r]	名詞 柔らかさ・安心
⑬ p.28		おわり [o] [a] [i] Ø * [w] [r]	名詞 (動名詞)

4-2. 絵本『ふたり』の分析

4-2-1 母音について

この絵本では、基本的に全て3拍の音から構成される語が、1場面に1語ずつ使われている。しかも、その語は語尾がすべて「り」で終わっているという特徴がある。そして、その3拍の音の構成を母音に注目してみると、次のような形になっていることがわかる。

表4では、音声記号を記したが、ここではわかりやすくするためにカタカナ表記で示してみる。

イーアーイ：4回

アーアーイ：2回

オーウーイ：2回

ウーアーイ， エーオーイ， エーアーイ， オーアーイ：各1回

この3拍のうち、後半2拍の組合せとしては、

アーイ：9回

ウーイ：2回

オーイ：1回

となっている。ウーイ（オーウーイ）の組合せが2回というのは、後述するように、⑥場面と⑦場面における対比という形で用いられている表現である。それを除くと、基本は「アーイ」という音の並びが基調となっていることがわかる。

母音の語感については、音象徴という立場からの研究によってその説明がなされている⁽⁴⁾。ここでは、浜野祥子（2014）及び黒川伊保子（2012・2019）によって、その音の語感についてまとめてみた（表5）。ただし、浜野はオノマトペに現れる母音の語感、黒川は単音としての母音のもつ語感を中心として説明されており、母音がいくつか組み合わせることによってどのような意味があるのかというところまでは言及していない。

（表5） 日本語の母音の語感

母音	浜野（2014）	黒川（2012）
イ	線状，細さ，高音，緊張	強い前向き（外向き）の意識の表出 やや尖ったコンパクトなイメージ
エ	野卑	広々と遙かな感じ，客観性を感じさせる
ア	広い，平ら，広範囲，目立つ	潔さと開放感
オ	目立たない	包容力と大らかさ，安定した存在感
ウ	突き出る	内向するナイーブさと集中力 内にこもって長い時間かける（熟成させる）

母音を単体として考えると、この絵本では母音が3 × 12で36回使われることになる。そのうちエは2回、ウは3回、オは4回と極めて少なく、残りがすべてアとイとで構成されているという特徴がある。この特徴は、赤ちゃん絵本の代表ともいえる『いないいないばあ』（松谷みよ子作・瀬川康男絵／童心社）でも、似たようなことが言える。表4の右の解釈欄でまとめたコメントと、表5の語感の説明と、アとイの母音の組合せが多いという分析結果とを結びつけて、そのつながりを認めるのはかなりのギャップがあるように思われる。むしろ、次に考察する子音に大きく影響されていると考えた方がよいかもしれない。

4-2-2 子音について

日本語の場合には母音の重要性が高いことで知られているので、母音の構成を見てきたが、語感をさらに豊かにするのはやはり子音であろう。

この絵本で用いられている子音は10種類（半母音としての[j] [w]（表中*印）が各1）ある。しかしながら、4-2-1でも触れたように、3拍の音から構成され、その末尾がすべて「り」で終わっているという特徴があることから子音[r]の使用頻度が最も高くなり15回となっている。

それ以外で見えてみると、[t]が5回と次に多く、[n]が3回、[h]が2回となっている。それ以外は全て1回ずつで、[k] [g] [b] [p] [s] [d]となっている。[r]の音も、末尾のものを除くと3回となり、最初の2拍の音の中で最も多く使われているのが[t]

であることがわかる。

母音の時と同じように、音象徴におけるそれぞれの音の語感を確認しておく。ここでは、1回限りのものは除き、2回以上用いられているものを取り上げる。

(表6) 『ふたり』に複数回用いられる子音の語感

子音	浜野 (2014)	黒川 (2012) (2019)
[r]	回転, 流動的な運動	華やか
[t]	弾力の弱い表面を叩く, 軽い, 小さい, 細かい, 弛緩, 目立たない	確かさ, 充実, たまる感じ, 生命力, にぎやか, 艶
[n]	捉えにくい, 滑り, 粘着性, のろさ 力のなさ, 折れ曲がる	親密感, 共感
[h]	美しさ, 弱さ, 息	ナイーブで優しい

専門的な語感の意味付けは表6のようになるが、実際の語感ということになるとやはり少しずれが生じているようにも思われる。また、黒川の説は、すべての音について体系的に説明されているわけではないので、不足している点も多い。

そして、ひとつひとつの子音の語感と、4-2-2で見た母音との組み合わせによる語感、さらには、物語として前後の言葉とのつながりなどとの関係においても、あるいは描かれている絵から読み取れる表情などの視覚情報なども、語感に大きな影響を与えていると考えられる。

4-2-3 対比について

そこで、注目したいのが場面⑥と場面⑦との対比である。場面⑥は、ネズミがネコから逃げて、水の中に飛び込むところである。その音が「トブリ」と表現されている。次の場面⑦は、ネズミを追いかけるネコが水の中に飛び込むところである。その音は「ドブリ」と表現されている。「ト [t]」と「ド [d]」、「プ [p]」と「ブ [b]」とで対比されている。ネズミの軽さ、小ささを無声子音の [t] [p] で表現し、ネコの重さ、大きさを有声子音の [d] [b] で表現しているのである。[p] や [b] は、子音としては1回ずつしか出てこないが、この物語でのネコとネズミを特徴づける大切な表現となっている。

さらに、文字（言葉）なしの場面⑧を挟んで、「ゲロリ」という場面⑨、「バタリ」という場面⑩のように、前半には現れなかった濁音「ゲ」「バ」（有声子音 [g] [b]）などが使われて、物語の受ける印象がいったん重さを増すようになっている。

このように、物語の流れ（構成）の中に使われている語の音も関係しているのではないかと考えられる。

4-2-4 物語の構成との関係

そこで、この物語の構成を考えてみたい。大きく起承転結の枠組みでとらえるとするなら、起：場面①～③，承：場面④～⑦，転：場面⑧～⑩，結：場面⑪～⑫となるのではないか。①と④はどちらも「ニ〇リ」で始まる。その意味では、起と承とが対比された形をとっている。また、承では場面⑥と場面⑦との対比が用いられていて、その帰結としての場面⑧、つまり言葉のない場面に導かれていく構成となっている。そして、ここを境にして、先に述べたように、転の中心部分である場面⑨「ゲ [g]」、場面⑩「バ [b]」という重みのある音に続く。

最後に場面⑪⑫では、「ネ [n]」「フ [h]」という弱いけれども、親しみのある音感、そして優しさが「フタリ」という音となって締めくくられる。

喧嘩していたネコとネズミが、「ふたり」仲良く寝ているという情景が映し出されているのである。そこに「優しさ」や「温かさ」というものが「言葉の響き」として読み手（音声化を考えると聞き手）に伝わるのではないか。

4-3. 分析のまとめ

以上、絵本『ふたり』を取り上げて具体的な分析を試みた。今回の分析では、母音と子音、音の対比という三つの観点と、物語の構成における音という観点からの分析であったけれども、この『ふたり』という絵本から見えてくる「言葉の響き」をかなり浮き彫りにすることができた。

この本は、オノマトペを基調とした単純な言葉の積み重ねによって作られた話でもあるので、分析も比較的やりやすかったとも言える。さらに、絵本の分類からすればこの本はオノマトペ絵本に分類される可能性もある。そうすると、「言葉の響き」や「言葉のリズム」の習得は、絵本の分類で見た中の「言葉・詩」の絵本においてなされるものであり、その中でも特にオノマトペがその対象となるものだと考えられがちになってしまう。

もちろん、典型的な「言葉の響き」をとらえるのには絶好の素材であることは相違ない。しかしながら、さらに分析的に考察することで、オノマトペ以外の言葉についてもその対象となる素材であることをより明確にしていく必要もあるだろう。

5. 今後の課題「言葉の響き」のとらえ方

前章においては、絵本『ふたり』を用いて、「言葉の響き」の視点からみた絵本の分析

を行った。そして、それなりに明らかになったこともあった。しかしながら、これと同じようなことが他の絵本でもできるのかということになると、まだ不確かなことが多い。

そこで本章では、「言葉の響き」の視点からみた絵本の分析的研究に関しての今後の課題、さらには児童文化財における「言葉の響き」をどのようにとらえていったらよいのかという研究の展望について3点述べておきたい。

5-1. 「言葉の響き」の視点からみた絵本の分析をさらに深化させること

4-3でも述べたように、今回は一冊の本を用いて分析をただけである。表現のほとんどがオノマトペによって構成されていることから、オノマトペ絵本の分析をしたとも言える。そのオノマトペ絵本の研究は、未だ十分なされているとは言えず、その成果を活かす段階には至っていないのが現状である。そのような中で、分析の対象を言葉・詩の絵本、さらには言葉・詩の絵本以外の絵本にまで拡張させていくことで、今回のような分析が「言葉の響き」との関わりをどれだけ深く解明することができるのかも不透明な状態ではある。

しかしながら、「言葉の響き」にこだわって絵本という児童文化財の分析を深化させていくことで、子どもたちが無意識に身につけていく母語としての「言葉の響き」や「言葉のリズム」が、どのようなメカニズムで形成されるのかを少しでも明らかにできるのではないか。

5-2. 研究の対象を絵本から児童文化財全般へと拡張させること

今回は、絵本を対象として「言葉の響き」について考察した。また、絵本の児童文化財における位置づけが、他の児童文化財との関係の中で流動的に変化するものであることも2章で明らかにした。その意味では、「言葉の響き」の視点から見た絵本の分析的研究は、絵本の周辺、紙芝居、童話などに必然的に拡張されていくことになる。オノマトペ絵本や言葉遊び絵本など、言葉を題材にした言葉・詩の絵本を中心としたメタ言語的な児童文化財のみが「言葉の響き」を感じる素材なのではなく、広く児童文化財全般の中に、「言葉の響き」がちりばめられていて、それらが子どもの言語感覚を豊かにしていくことに影響しているにちがいない。それを明らかにするために、言語文化財としての絵本を言葉・詩の絵本以外のもの、さらにその周辺の児童文化財にも範囲を拡張させて、「言葉の響き」について分析をすることが必要になるのである。

3章で取り上げた絵本研究の中で、音楽性に着目するという視点があった。その意味

では、わらべうたや手遊びなども「言葉の響き」に焦点を当てた研究がなされてもよいのではないか。

5-3. 幼稚園教員養成という観点から分析力を身につけさせること

最後に、幼稚園教員養成課程における「言語感覚」の重視に対応するためのカリキュラムとして、今回の「言葉の響き」という視点をどのように位置づけていくかも考える必要がある。

つまり、幼稚園教諭として絵本（あるいは児童文化財全般）という素材を分析する力をいかに身につけさせるかということを考えなければならないということである。それは、小学校以上の教員養成課程における教材研究と指導法研究との関係における教材研究の力をいかにつけさせるかを考えることと同様である。具体的には、「保育内容の専門的事項の科目」として扱う内容面の整備とも関わってくる問題である。

無藤隆代表, 保育教諭養成課程研究会 (2017)『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』では、新課程に対応するものとして「幼児と言葉」(1単位)という科目を設定している。その科目の三つの柱「言葉の持つ意義と機能」「言葉に対する感覚を豊かにする実践」「言葉を育て、想像する楽しさを広げる児童文化財」のうちの二つ目が「言葉の響き」に関わる事項になると言えよう。ここで、絵本を中心とした児童文化財を具体的に取り上げながら、分析力を身につけさせることが必要である。分析する力を身につけさせるには、日本語の音声に関する知識も当然基礎的なものとして必要となるだろう。それに加えて、音象徴や語彙的な知識が関わり、さらに作品の物語性などについての理解も必要となってくるのである。

このような絵本やその他の児童文化財の特徴を分析できる力があってこそ、その読み聞かせの方法などの指導法の科目との連携が図れるものと考ええる。その段階では実際の音声化にともなう言葉の身体性が大きく関わってくる。

注

- (1) 保育内容「言葉」のテキスト類, 「児童文化」のテキスト類を参考にしながら、主に駒井美智子編 (2018), 川勝泰介・浅岡靖央・生駒幸子編著 (2018) の2冊からまとめた。
- (2) 「オノマトペ絵本」を取り扱った研究としては、古市 (2014), 横田・鈴木 (2018) を挙げることができる。
- (3) 絵本におけるオノマトペの研究は、Ciniiによれば、比較的新しく (2004年以降), その研究

対象も外国語学習や日本語学習の手立てとしてのもの、障害者の言語習得に関わるものが多く、幼児の言語習得に関わる研究は極めて数が少ない。それゆえに、絵本における「言葉の響き」に関わる研究はオノマトペを対象としたものでも、まだまだ手薄な状態にあると言ってよいのかもしれない。<https://ci.nii.ac.jp/search?q=%E3%82%AA%E3%83%8E%E3%83%9E%E3%83%88%E3%83%9A%E3%80%80%E7%B5%B5%E6%9C%AC&range=0&count=20&sortorder=1&type=0> (2020.12.21 最終閲覧)

(4) 音象徴については、川原繁人 (2015・2017) を参照。

引用・参考文献

- 生駒幸子 (2018) 「絵本と童話」 川勝泰介・浅岡靖央・生駒幸子編著 (2018) 『ことばと表現力を育む児童文化』 萌文書林
- 黒川伊保子 (2012) 『いい男は「や行」でねぎらう いい女は「は行」で癒す』 宝島社新書
- 黒川伊保子 (2019) 『ことばのトリセツ』 集英社インターナショナル新書
- 川勝泰介・浅岡靖央・生駒幸子編著 (2018) 『ことばと表現力を育む児童文化』 萌文書林, pp.120-121
- 川原繁人 (2015) 『音とことばのふしぎな世界』 岩波書店
- 川原繁人 (2017) 『「あ」は「い」より大きい!? 音象徴で学ぶ音声学入門』 ひつじ書房駒井美智子編 (2018) 『保育者を目指す人の保育内容「言葉」第2版』 みらい, pp.100-102
- 竹内唯・奥忍 (2007) 「絵本の中の音楽―画・言葉・テーマとの関連に着眼して―」 『岡山大学教育実践総合センター紀要』 第7巻, pp.27-37
- 野上秀子 (2018) 「言葉を楽しむ一言葉と心: お話の世界を楽しむために」 大越和孝・安見克夫・高梨珪子・野上秀子・齋藤二三子編著 『改訂新版保育内容「言葉」言葉とふれあい, 言葉で育つ』 東洋館出版社
- 浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ音象徴と構造』 くろしお出版
- 古市久子 (2014) 「こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本」 『東邦学誌』 愛知東邦大学, 43号, pp.87-104
- 無藤隆代表, 保育教諭養成課程研究会編 (2017) 『幼稚園教諭養成課程をどう構成するか』 萌文書林
- 文部科学省 (2018) 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館
- 山室和也 (2019) 「幼小連携の視点からの「言葉の響き」に関する研究―小学校「国語」から幼稚園「領域言葉」へ―」 『初等教育論集』 第20号, 国士舘大学初等教育学会
- 横田由紀子・鈴木ゆみこ (2018) 「豊かな言葉や表現につながる絵本の選択について―オノマトペ絵本を中心に―」 『札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部紀要』 48号, pp.91-101

引用絵本

瀬川康夫 (1981) 『ふたり』 富山房